話題提供３：上谷順三郎
「オーストリアにおける＜話すことの教育＞と言語教育」

上谷　上谷です。よろしくお願いいたします。私の発表のタイトルは「オーストリアにおける＜話すことの教育＞と言語教育」というものです。このタイトルについて、少しだけ説明いたします。私が新プロでやっております研究がドイツ語圏におけるコミュニケーション教育なのですが、その一環として今回ドイツ語圏の中のオーストリアを取り上げまして、その中の「話すことの教育」とここでは訳していますが、「Sprecherziehung」という独特な形での教育がありまして、そのことを紹介しながら、コミュニケーション教育に繋がる一部分を紹介したいと思います。このことは、午前中の部でも私がコメントをした時にお話ししましたが、話すことの教育を中心として、オーストリアの場合ですと教科間の関連が図られていること、それから、同じ言語教育の中で話すこと以外の読むことや書くこととの教科内での関連も図られているように思いまして、その 2 点について参考になるのではないかと思い発表いたします。

合科的指導としての＜話すことの教育＞

まず、1 点目ですけれども、合科的指導としての話すことの教育、これは今申し上げましたが、日本における国語教育と他教科との連携を考えるために参考になるのではないかと思います。まず、その合科的指導についてですけれども、オーストリアの学習指導要領、ここでは特に日本でいいます小学校の 4 年間、国民学校の例を引いてあります。合科的な指導、教科を結び付けて一つの目標を達成するために行なうものがここに挙げた 11 教育です。一通り紹介いたしますと、まず「健康教育」、それから「読書教育」「メディア教育」「芸術教育」「政治教育」「異文化間教育」「性教育」「話すことの教育」「環境保護のための教育」「交通安全教育」「経済教育」こういったものが合科的な指導の下で行われるべきだとして挙げてあるものです。その中で、「芸術教育」と「話すことの教育」、実はドイツ語、日本でいう国語科ですが、ドイツ語科が関わっているのは、特にこの 2 つです。これを見ましても、ドイツ語つまり言語教育が、言語教育に限らず他の領域と関わっているのがよくわかると思います。今回はその中の「話すことの教育」を取り上げるわけです。「話すことの教育」として関連づけられている教科は「ドイツ語」と「外国語」と「音楽」があります。ちなみに、外国語については、オーストリアでは小学校３年生から取り上げられていまして、つまり国語科だけではなくて外国語も含めた、しかも音楽も含めた話すことの教育が構想されているということです。そのような話すことの教育についてお話ししたいと思います。

話すことの教育

話すことの教育が一般的にはどのように捉えられているかを挙げたのが次の(2)です。ここでは、3 つの辞典類からの引用をあげていますが、最初のものは、これは 1955 年の、

いささか古いものですが、ドイツ語圏では今世紀の初頭から合科教授が始まっています。この話すことの教育ということば自体は結構古いものですので、ここに挙げてあります。少し紹介いたしますが、「＜話すことの教育＞の課題は、多様な表現形態における音声言語の意識的な育成である。そのために、単なる言語技術をこえたより大きな領域を含むものである」という性格づけがなされています。そして、具体的な課題は８つです。「①言語聴取の教育」「②話し声の形成」「③音声・発話障害の治療」「④標準国語の形成」「⑤意味を捉えた音読の指導」「⑥文学作品朗読への導入」「⑦遊びにおける表現力の育成」「⑧個人で自由に話すときの言語構成力の助成」と挙がっていまして、一見してわかるかと思いますが、話すこと、音声言語に関わるものが中心になっております。このように、学習指導要領の中で教科間に跨ったものとして立てられた話すことの教育がオーストリアの一つの特徴だと思います。

音楽と国語の合科的指導の可能性

日本の学習指導要領でも合科的といいますか、他教科との関連を図るべきだということは、学習指導要領の中の補足的な部分には書いてありますが、なかなか具体化されて書かれてはいません。その点で、オーストリアの場合の音楽科と国語科の合科的指導の可能性として中地氏の論文では次の４つが挙げられています。①姿勢・呼吸・発声・発音等、基礎技能の育成、②音量・速度・アーティクレーション・表情等、＜ことば＞の音楽的要素の認識、③ことばのリズム・響きを追求した表現活動、④わらべうた・ことばあそび等、教材の融合です。ここに挙げられたものなどは国語科における音声言語指導、特に群読などとの関連が図れるのではないかと思います。以上、教科間に跨る話すことの教育について紹介しました。

オーストリアの言語教育

続いて、「オーストリアの言語教育」の方に移ります。ここでは、教科内、ドイツ語科の中でのそれぞれの領域の関連についてお話しいたします。まず(1)「基礎学校における統合的ドイツ語授業」ですが、今回の資料は国民学校、日本における小学校４年生までのものです。そこにおける目標として３つ挙げてありましたので、紹介いたします。「①＜コミュニケーション的な＞目標にねらいを定めること」「②可能な限り＜状況＞から発して、再びそのようなところへ帰着すること」「③個々の学習領域を＜統合的に＞一緒に結びつけること」。ここに挙げられていますキーワードが今回の発表にもすべて関わるかと思います。コミュニケーション、それから状況、それにふさわしい自然な言語使用というものが狙われていますし、それからいろいろな言語領域を統合的に扱おうということの３つです。

「読む」と「話す」の検討

最後、残り時間を使いまして、ドイツ語科の中の読む、話す、書く、それから作文、正

書法、言語観察・考察という６つの領域中の読むと話すのところだけを簡単に紹介したいと思います。ここに挙げてありますのは（資料１）、小学校２年生までにあたるドイツ語科の中の、しかも「読む」と「話す」に関してのところを訳出したものです。詳しい説明はできませんけれども、所々に点線の下線が引いてあるところ、そこは話すことのところに挙げてありながら、読むことをも関連があったり、それから読むことの中に挙げてあるのだけれども、話すこと、特に音楽的な要素が多いものが含めてあるものに下線を引いてあります。ここに挙げた中で、特に紹介したいと思いますのは、ドイツ語科のカリキュラムの中の話すことについて挙げたところです。しかも話すことの中に全部で５つの項目が挙がっておりまして、その中の最後の２つは、「言語練習（言語能力の拡大）」と「言語練習（明瞭に話す）」とあり、どちらも言語練習というふうになっています。まず、上の方の「言語練習（言語能力の拡大）」というのは元のことばでは「Sprach」ということばが使ってあります。直訳しますと「言語」というふうに言えます。それから、その下の「言語練習（明瞭に話す）」の方は「Sprech」で「話すこと」で、先ほど紹介しました「Sprecherziehung」に直接繋がるものです。そういったいわば文字言語的なものと音声言語的なものが両方挙げてありまして、それぞれについて説明がしてあるわけです。しかも、下の方の「言語練習（明瞭に話す）」は「自然にそして表情豊かに話す」、「テクストをまねてつくるようにしたり感覚的につくるようにして話す」、という項目を見ていただければわかりますように、読むこととの関連ももちろんあります。それから、状況に応じて話すという点から関係してくるのですが、「自然に」「自然な」ということばが所々出ており、この点を話すことでは強調していると思います。以上、簡単ではありましたが、時間が来ましたので発表を終わりにいたします。

髙木　どうもありがとうございました。今、オーストリアの言語指導についてお話しいただきましたけれども、続きまして安さんの方からはイギリスの学習指導等について、ご説明いただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

＜資料＞基礎段階Ⅰ（基礎学校前期２年間）の学習要領（Egger,1991）

p.166
教育課程と指導課題
ドイツ語の授業では、子どもたちを――個々の学習の前提を考慮しながら――口頭および文字における人間関係理解にかかわるレディネスや能力に応じて、言語による学習および言語を通しての学習によって助成することを課題とする。
個々の点では次のような課題がある。

―子どもの個人的言語を標準的な言語へと広げること
―口頭および文字における正しい言語使用を練習し身に付けること
―読むことおよび読まれるものとの相互交流への関心を高めること
―創造的な言語使用を開発し助成すること
―われわれの言語の機能や構造について、いくつかの基本的理解を獲得させること
―次第次第に自己教育力を身につけるべく、簡単な作業技術および学習技術を伝えること。

授業の対象であるドイツ語は以下のような領域に区分される。

―話すこと
―読むこと
―書くこと（基礎段階Ⅰのみ）
―テクストを作ること（書く）
―正書法
―言語観察・考察

この領域区分は事物の構造と学習指導要領の素材の面での方向を明らかにするが、しかしながら決して学習領域の有効な関連づけの妨げになるべきではなく、それゆえ教師にとって子どもに応じたそして事態に即した授業を可能にすべきものなのである。
p.167
基礎段階Ⅱでは、書くという領域は、その学習の対象に、部分領域の分類外におかれたままになっている彫刻教育を組み込んでいる。

話すこと：

＜話すこと＞は、ドイツ語授業の最も重要な部分領域の一つであり、五つの課題区分をかかえ、基本的で長期的な目標を含んでいる。部分領域＜話すこと＞の本質的課題は、生徒たちの口頭的コミュニケーションに対する準備と能力を徐々に高めること、そして標準語の可能な限りの確実な使用へ導くことである。

読むこと：

基礎段階Ⅰでの読むことの授業は、生徒たちに基本的な読みの技術を伝え、それとともにテクストとの出会いや相互交流を可能にするという課題を持っている。経験を積めば積むほど、生徒たちは読むことをわたしたちの文化に対する一つの意味深い入り口として、特に情報獲得や楽しみのための一つの本質的な手段として経験するようになる。

基礎段階Ⅱでの読むことの授業では、読むことを通してそして読んだことの相互交流を通して、自分たちの人生経験を越えてさらに先まで自分自身や他の人に対する理解を深め、並びに自分自身についてや他の人についての情報を与え、楽しむことを可能にするような経験を積んでいく。
様々な形態のテクストとの多様な出会いや相互交流は、一人前の読書人の開拓に役立つ。こういった連関において、生徒たちの読みの技術も拡大され定着されていくのである。

書くこと（基礎段階Ⅰのみ）：
書くことの授業の課題は、基本的な慣習的文字体系の使用を生徒たちに指導することである。その際、書くことはコミュニケーションやドキュメンテーション（証明）の一つの形式であるということを経験するはずである。特に、書くことの授業は、わたしたちの文字体系の確かな習熟へと導くべきである。

p.168
テクストを作ること：
部分領域＜テクストを作る＞では、生徒たちは自分たちの伝達準備状態や話すこと・書くこと・正書法で獲得された技術の状態のもとで、だんだんと自覚的に文章として表現すること、そして自己中心的に、たとえば体験したり観察したりしたことについて書いたり、相手中心的に、たとえばお願いや質問などを行う。基礎段階Ⅱでは、事実に即して書くことも行う。

正書法：
正書法の授業の課題は、生徒たちに標準的に正しく書くことを動機づけること、正書法についての基本的な知識を伝達すること、継続して正しく書く能力を高めること、簡単なルールを知り応用するよう指導すること、そでぃて可能な限り頻繁に遂行の技術を教えることである。

言語観察・考察：
言語観察の課題は、わたしたちの言語の機能や構造における次第に増大する見識を伝えることとそれに合わせて概念的に確かなものにすることである。

教材

基礎段階Ⅰ（第一、第二学年）

話すこと

第二学年終了までで、個々の課題の中での重点と見なされる。：

物語る、報告する、傾聴する場合
―物語ったり報告する場合、他の人を意識して傾聴し、聞いたことを表現することができる

状況に応じて話す場合
―様々な状況の中で言語的に適切にふるまう
p.169
話し合いの場合
―様々な話し合いの形態において、話したり、聞いたり、理解したりする際に、お互いに取り組む
――一緒に話すということは調整されなければならないということを理解し、それによって簡単な

規則を取り決め、注意を払う
—学校では、獲得された言語形態と言語的な手段を、話し合いにおいても次第に適用する

言語練習の場合 Sprachuebung（言語技術の拡大）
—様々なレベルで（語義、語場、語親族、上位概念など）語彙を拡大する
—頻繁に使用される文モデルを自由に使いこなし、次第に標準語へと移行させる

言語練習の場合 Sprechubung（明瞭に話す）
—声に出して正確に言えること、ならびに単語やテクストをうまく明瞭に発音することができる
—表現豊かに話すことができる

物語る、報告する、傾聴する：

動機づけ
リラックスした雰囲気の中で、物語ること、報告すること、傾聴することについての喜びや心の準備を育てる
物語ろうという気を起こさせるような適当な状況を取り上げるかあるいは作り出す

体験したこと、観察したこと、感じたことを報告する
個人的な体験、出来事、観察などについて物語る
絵やマンガについて話す
自分の（固有の）気分や感情を表現する、ならびに他の人のそれを認め理解する、たとえば、慰め、安心、それらと同じような言葉での援助によって提供する

言語とののびのびとした（遊び的な）、創造的なつきあい
声あそび、言葉あそび、リズムの素人細工およびその他のことを探る
名前、概念、歴史などを案出したり変えたりする

p.170
傾聴する
教師の物語に耳を傾ける、そしてそこから自分の物語に対する刺激を得る。同級生の物語に注意深く耳を傾ける。
ふさわしい物語状況（物語グループ、規則正しい物語時間を考慮に入れる、場合によっては注意の練習やそのようなこと）によって受容準備と受容能力を目覚めさせ助成する。
聞いたこと（まずは精密さや完璧さを求めずに）を再現する
聞いたことのについて意見を述べる（たとえば、質問する）

状況に関係づけて話すこと：
簡単な話す状況での経験を集める、状況を言語的に克服する
話す状況を取り上げ、遊び的に試す、たとえば、
—あいさつをする、別れを告げる、あやまる
—問い合わせる、ないしは情報を提供する
—提案を言葉にする（席順、休憩の具体化、遊び、自由時間の具体化）

話し合い：
話し合いへの案内；話し合いの前段階の形

お互いに話すことの遊び的な形（たとえば、知り合う、なぞなぞ、質問遊び、聞き取り遊び、単語を転送するための遊び）
簡単なコミュニケーション形態（話の輪、物語グループなどで呼び続ける）
呼びかけ、結びつける、さらにつづける、そのようなことの簡単な形態を次第次第に確実なものにする

聞くことと理解することの訓練（教育）
わかることから、意識して耳を傾けたり注意深く聞くことを経て、相手に向かって聞くことまで

p.171
二、三の重要な話し合い規則を調べ、取り決め、守る
話し合い規則の重要さを調べる、ないしは取り決め、守る（たとえば、単語を転送する、話し手を見つめ、話し手の話に耳を傾け、話し手にぞんぶんにしゃべらせる、話し手が不適切だったりわかりにくく話しても話し手を笑わず、話し手の様々な話し合いのｋうぃたいへ案内する
子どもたちの経験したことや興味のあることに基づいたテーマについてや、あるいは様々な学習領域における事実との出会いに基づいたテーマについて、あるいはお互いに話すということそれ自体について、ペアで、グループで、サークルで話し合うこと（たとえば、カスパー・シュピーレンを用いて）

言語練習（言語能力の拡大）：

語彙の拡大と多様化
対象、絵そしてそれに似たことについて話す：活動、騒音、観察などを言語的に示す
新たな単語の単位に関する手持ちの言語的要素を組み合わせたり、それらの意味を探る
単語の意味の範囲を限定する、内容的に定める、たとえば、一部の反対語（大きい－小さい）によって、あるいは小さい言語的範囲によって

正しい文モデル（文型）を練習する
同じ文構造を持つ文を類似的に作る
しばしば誤って使用されるような文モデルの練習、とりわけ、方言と標準語との間の違いから起こる誤った形態の練習

言語練習（明瞭に話す）：

自然にそして表現豊かに話す
子どもたちの自然な話（し方）を促進し強化する
p.172
言語を表現豊かに表す（たとえば、言語的な表現手段によって感情、意見、興味を支える）

明瞭に話す
話すときに明瞭な発音に意識的に注意する；早口言葉やそれに似たようなテクスト

を明瞭な発音でくりかえす；言葉遊び
声（音）を区別する（識別する）ための練習（たとえば、singen-sinken, reden-retten, Liebe-Lippe）

テクストをまねてつくるようにしたり感覚的につくるようにして話す
リズム、詩句、詩について話す；リズム語彙を発見する
詩句や短い詩を自由に朗読する
方言―標準語
方言と標準語を比べる；共通点と相違点を確かめる

読む

授業活動では、生徒たちは第二学年の終わりまでに、次のことをめざして努力する
―可能な限り持続的な読書の動機を育成する
―年齢にふさわしいテクストをなじみのある雑多なローマ字で読むことができる状態にある
―これらのテクストの意味を把握できる
―簡単な仕方でテクストと真剣に取り組むことができる

最初の読み（根本的な達成）：

最初の読みの授業にとっての前提として、狭い意味で、以下のいわゆる根本的な達成には、特別な意義がある（それについてはまた、関連した教授法を見よ）

読書の動機
読書意欲を喚起し読む喜びを受け取るための、永続的で目的付けらあれた処置

p.173
言語助成
言語発達のための包括的で目的づけられた処置；口頭的な言語授業と読む学習の相互支援

話すことの運動学
発音明瞭に話すこと、調音の観察

Akustische（オーストラリア：音響効果のよい）音響効果に関する、分類能力と感知能力
聞いた言葉を単語に区分する；似たような響きのする他の単語と区別し、その後再びそれを聞き分ける；一つの音を認識し、他の音と区別し、その後再びそれを聞き分ける；簡単なリズムを認識し、感じ取り、自ら創造する

視覚効果に関する、分類能力と感知能力
絵の上の詳細（単一性）を認識し、その後それを再び見分ける；描かれたり書かれたりしているテクストの構成を言葉で認知し、その他のものについてのいくつかの言葉と区別し、そのご再び見分ける

書かれたもの（文字）やその他の記号のもつ象徴的な特徴

文字とその他の記号（たとえば、信号）が意味していること、そしてそれらの意味は「読むこと」によって発見できるということを、把握する

基本的な概念

語、音、書かれたもの、文字；左、右、上、下、前、後ろそしてそのようなこと

最初の読みの授業（教科課程）：

選ばれた方法や文字の起源といったことに依存せず、基礎段階Ｉでの固有の意味における最初の読みの授業は、より多くのステップを含んでいる。その際それらの順序は決して拘束力を持つ方法的な順序を示しているのではない。

<u>音響的、話すことの運動学（音声運動学）的、視覚的に、文と単語をきちんと細別する</u>

文から単語へ細別する
似たような響きの単語を話し（音声化し）、比較し区別する
音と音のグループを聞き分け、話す（音声化する）

p.174

同じ文字のグループを異なる単語に固定する、他のグループと区別し、特徴づける
解体と構築の練習によって単語を細別する
音と文字を取り替え、新しい単語をつくらせる

音と文字の組み込み（配分）をそれらの異なる変形や質において把握する；文字の優位

多方面の練習において、それぞれの文字に、それに対応する音を組み込み、明瞭に発音する（たとえば、文字を探す、固定する、名付ける、分類する、区別するなど）
特定の文字をより多くの音に対しても使用する（たとえば、sehen, Strasse）
異なる文字ないしは文字のグループを同じ音に対してお互いに組み込む（たとえば、大文字－小文字）

単語や文字グループを蓄積し再現する

文字の形の響きの像そして音声運動学再現をしばしば提供することによって選択された単語を印象づける
単語や文字グループをすばやく再認するための練習

構築するべく一緒に読む

構築するための一緒読みでは、まず知っている単語を読み、次に良く知らない単語を読む；それらの意味を把握する
ナンセンスな単語を組み立て、読む

<u>多様な構築的そして解体的練習</u>

まずは知っている単語を用いて、次は知らない単語を用いて、文字を取り替えたり、省略したり、追加したりすることによって、一つの単語の意味を変える新しい単語の中に知っている要素を見つけだし、読むときの助けとして利用する

p.175

知っている単語や新しく習った単語を用いて文を作ったり、作り替えたりする。それらの単語の意味ないしは意味の変化を把握する

継続的な読書：
読みの確実性を読みの流暢さを高める
良い発音のための多様な練習
だんだんと大きくなる意味のまとまりの中でテクストを総括的（要約的に）に読む、たとえば、「フラッシュ読み Blitzlesen」での練習によって。
最も重要な文記号に注意する

意味を把握するために読む練習
テクストを声を出して読むことから静かに読むことまで
読んだテクストについての質問に答える
重要なこととそうでないことの区別
書かれた指示・命令、要求、そのようなことを理解する

できるだけ自然な読書環境の中で文学的テクストと出会う
環境の歴史、メルヘン、子どもの詩、短いドラマのシーンなど
個人と読書との関連づけ

前に練習したテクストを自然な読書環境の中で、相手中心的で意味を形作るための読書（朗読）を行うための最初の練習
文学的テクスト
説明的テクスト（たとえば、手引書、招待、要求、指示、命令、照会、リスト、メモ）
個人の記録や同級生のメモを読む

様々な形式のテクストとの自力での討論を開拓する
意味加工についての話し合いと討論
態度決定（表明）、比較、対置、変更、想像力豊かな前進など

＜文献＞
上谷順三郎（1988.10.20）**：西ドイツ文学教育の同行をめぐっての一考察―受容理論と文学教育の接点を中心に―；筑波大学教育学研究科編『教育学研究集録』第１２集、**pp.88-96
上谷順三郎（1990.3.31）**：西ドイツの文学教育におけるコミュニケーションの問題；全国大学国語研究学会編『国語科教育』第３７集、**pp.131-138
上谷順三郎（1997.3）**：読者論で国語の授業を見直す；明治図書**
土山和久（1995.3.31）**：＜行為―生産志向的文学教育＞における「生産志向」概念に関する研究；広島大学国語教育学会編『論叢　国語教育学』第３号、**pp.50-64
中地雅之（1995.2.28）**：＜ことば＞の表現活動を通じた音楽科と国語科の合科的指導―日・オーストリア学習指導要領の比較研究―；『岩手大学教育学部研究年報』第５４巻第２号、**pp.143-152
Boehm, Winfried: Woerterbuch der Paedagogik; Kroener, 1988.
(13., ueberarbeitete Aufl.)
Egger, Traude u.a. (Hrsg.): Lehrplan der Volksschule;
Oesterreichischer Bundesverlag, Wien, 19871　19915
Egger, Traude u.a. (Hrsg.): Kommentar zum Lehrplan der Volksschule;
Oesterreichischer Bundesverlag, Wien, 1990

Lexikonred, Meyer (Hrsg.) : Schuelerduden.
Die Paedagogik; Dudenverlag, Mannheim, 1989
Rombach, Heinrich (Hrsg.) : Lexikon der Paedagogik IV, Herder, Freiburg, 1955
Wildner, Paul Peter (Hrsg,) : Deutschunterricht in Oesterreich; Peter Lang,
Frankfurt am Main, 1995